

70歳太平洋処女航海

村田 和雄（昭和34年電化卒）

2006年5月21日長男、次男に見送られ静かに和歌山の岸壁を離れた。8月24日サンフランシスコ近くで、陸地に衝突しそうになるまでの95日間、風という自然エネルギーで5,000マイル（実質7,000マイル）を渡った。船上のエネルギー源は70Wの太陽電池2基。水は一日2リットル、食料はレトルト、フリーズドライ、真空パックと特殊なパン（96日間、味が全く落ちない）。もちろん捨てるような食べ残しはない。7.8メートルの小さなふねの中で結構快適な生活ができる。天候は悪く、80%が曇りか霧で太陽電池の出力が低下するので、電力の節約に励み、電話もメールも毎日10～20分以内とした。毎日必要な情報はこれで十分である。

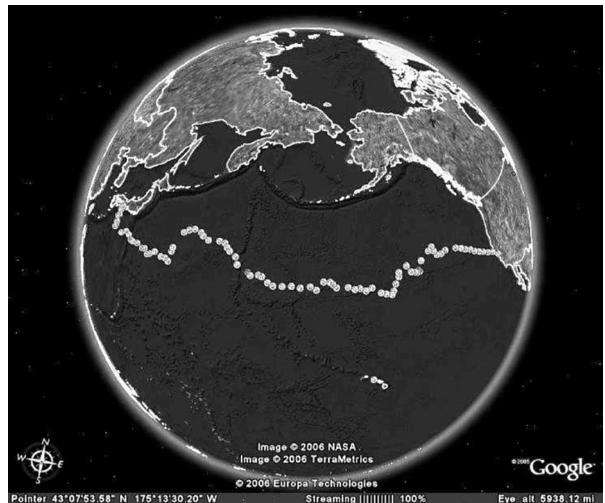
身体をロープで縛ることにしていたが読書の効率は極めて良い。適度に揺れて集中できるためかも知れない。私のような戦中派は環境に合わせることがうまいと思う。窓の外は広大な海の景色、空も雲も変化する。中国の皇帝はあの広大な紫禁城の中の小さな数坪の部屋に、好きな美術品を置いて安らぎのひと時を過ごしたという。自由も不自由も実は本人の基準がどこにあるかによる。幸福も同じであろう。

長さ7.8メートル、幅2.7メートルの空間は私にとって快適といっても良いほどであった。

航海の計画は兄弟にも伝えないぐらい静かに進めてきた。最後の仕事の3日後に厳冬の一人合宿に入ったから殆ど気付く人はいなかった。ただ家族だけには一年前、ふねを発注する時点で伝えた。大金を使うし何より家族は覚悟をすべきだと思ったからだ。女房は長年の付き合いでの私の性格をしっているから、沈黙をまもったが、娘は電話の向こうで泣き出した。そこで“人生の別れは元気な時に覚悟するのが良い”といってみた。確かにその後の一年は合宿中の島に遊びにきたり充実したものと



出港直前。和歌山のマリーナにて



太平洋を横断した咲良丸の航跡（和歌山～サンフランシスコ）

なった。私は100% 生きて帰る強い意志をもっていたが結果は50:50と覚悟していた。処女航海であり何が起こるかわからない。家族にはできるだけ参加してもらうべくタスクを課した。女房は食料調達と食事の日々の割り付けである。次男は最近の航海用の衣服を推薦してくれた。娘は英語に堪能なのでメールセンターを引き受けた。長男は子供達3人が各自選曲した300曲の音楽を整理してディスクにいってくれた。オペラあり、クラシックあり、ジャズあり、ハワイアンありと多彩で、海の上の生活に大いに潤いを与えてくれた。海の上では大声で歌ったり、踊ったりもした。

ふねは出港一年前に発注していたが、実は2年前までは具体的なことは決まっていなかった。とにかく金、健康、航海の知識、各種資格の取得などの準備はしてきたが肝心の遠洋航海が可能なふねの製作については皆目わからなかった。急転直下話が前に進んだのは途方にくれた末、ネットで太平洋横断経験者をしらべた時からである。ネットを調べていくと若い頃に太平洋横断をされ、今は一人でふねを作っている方が海の広場というブログを書いていた。

一度首実検をしてもらおうと思い四国松山に電話して会うことになった。お会いして近くのハーバーの岸壁を登ったり降りたりしていたが彼は私の計画に対し何もいわなかった。私は首実検は合格したと勝手に解釈することにした。次は信頼できるふねの調達である。首実検の彼氏に相談し、いろいろアドバイスをうけたが、どうもうまい案がない。そのうちに彼が自分で作るといってく



洋上の夕陽

れたのでふねの製作もまかせることにした。2ヶ月ごとに大阪から松山を訪問し、ふねができていくところを見学した。

若者の成長を助けるという65歳からの5年間の仕事にけじめを付けた3日後に四国の松山に行き、ふねを向えの中島という島に運び、3ヶ月半にわたる厳冬の一人合宿が始まった。ふねとのパートナーシップをつくることが目的である。先ずはふねの離、着岸作業。一人だから吹いてくる風の方向によって、この作業が結構難しい。次は沖に出てふねの揺れ方、直進性など、このふねが持つ固有の性質の把握。そしていろいろの風に対し前後2枚の帆の面積や角度の調節。最後は風利用の自動操舵装置をとりつけて仕上げを行った。

夜も昼も24時間の自動帆走となるから私の役目はふねのコンデションを常に最適に保つことである。気象を読み、波を読んで荒天になるまえに最適化をはかるのだ。

ふねが80%ほど出来上がったある日、堀江謙一さんにお会いした。そもそも今回の航海の動機は、1962年、堀江さんが23歳の時に太平洋処女航海を成し遂げた快挙に遡る。3歳年上の私はすでに結婚をしてサラリーマン生活をはじめていた。感動、感激するも、身動きが取れない。夢として胸に秘めるしかなかったのである。仕事では、常に全力を出してきていたので、後悔することはないが、この太平洋横断という積み残しが人生のもやもやとなっていた。堀江ご夫妻は快く私の申し出を受けられ、その後も数々のアドバイスをしてくれた。

咲良丸の咲良は孫娘の名前だが、良く咲く、結果良し、の意味でよい名前だと思った。

出国の5月21日朝、出国の手続きをすまし、10時ごろ北風にのって一路紀伊水道を南下した。最大の危険はふねとの衝突だったので、いかに素早く紀伊水道から脱出するかを考え、できるだけ半島の先から出ようとし

たが、本船は室戸や串本の先端から友が島海峡に向けて直行するだろうから、水道の真ん中を航行すれば最初の夜も寝ていけるかもしれないと目論んだ。ところが最初の夜は風がなく、煌々と輝く本船の明かりや機関の音に悩まされ一晩中デッキにいることとなった。

サンフランシスコと和歌山の中間点はほぼ日付け変更線に近い。航海日誌によれば、この日本サイドの方が低気圧が多く、この間の航海日数の半分にあたる27日間が10メートル以上の風が吹き、アメリカサイドは15日間であった。この間20メートル以上の風が3回、一度は横転した。

怖いのは何といっても最初の嵐で16ミリの木の船体の外側はうなりを上げた海水が流れ、デッキの上は鋼線を震わす轟音と共にどこからともなく来る不定期の大波のどんという音。とても生きた心地はしなかった。それでも次第に怖さはなくなっていました。嵐の強さ毎にどのように対処するかという工夫に興味を持つようになった。風利用の自動操舵だから、ふねの進行方向は風の方向によって左右され航跡は結局北緯34度の和歌山から30度に下がり40度に上がり36度に下がり43度にあがり38度のサンフランシスコに下がるという40%ほど長い距離を走ることになった。

航海中は好きな海を味わい人生を振り返るのに絶好の機会であった。昭和という時代、戦争のこと、人類と生物、200年後の人類のことなどを考えてきた。それらを揺れる船の上でタイプを打ち海外の友人にメールしてきた。この便りは50報となり、エイバッカズーム社からの“70歳太平洋処女航海”という本になった。本になったのは偶然である。

たまたま大学時代の親友の元山氏が英文のコピーを見て、“これは日本の団塊の世代に元気がでるのでネットにのせたらどうか”とアドバイスしてきた。“私は無理だが貴方がやってくれるのならどうぞ”といったところ彼が私の下手な英文を日本語に訳して知り合いのエイバッ



霧か曇りで1回しか行わなかった洗濯

クズーム社のブログに載せてくれたのである。ふねがサンフランシスコに近づくころ社長の堀部さんが本にしたいようだ、との話があり、やがて日の目を見た。一方 65 歳から 5 年間顧問をしていた、台湾のデルタ電子の創業会長のブルースさんも出版の提案をしてくれた。彼はさらにサンフランシスコまで迎えにもきてくれ、歓迎パーティーを開いてくれたのである。

96 日間の航海も最終段階に入り、明朝 4 時か 5 時にサンフランシスコへ入る道しるべとなるポイントレイエス岬に近づく予定で夕方 7 時ごろ床に就いた。だが高ぶる気持ちのためか夜中の 12 時ごろ起きて、位置確認のため GPS を開いた。まだ 20 数マイルある。ふねは 4.5 ノットで走っているのでまだ 2 時間は大丈夫と思い、床にふたたび入りかけた、が、将にこの時、何者かが私に対し“海図の上で位置を確認しろ”というではないか。そこで PC を立ち上げて位置を確認すると、何と陸の上だ。この時ばかりは直ぐエンジンをかけデッキに飛出したが、目の前は煌々とした陸のあかりである。即座に舵を反対の暗闇にきり、間一髪難をのがれた。

後で調べると陸地までは 4 マイルあとと一時間以内の距離であった。この夜は風が強く帆を全部降ろし船体に受ける風だけで 5 ノットほどの速度で走ってきたの

だが、このときもまだ風を利用した自動操舵を採用していたのがそもそも間違いで、風が少し北から西に変るにつれ、ふねは東から北東に向かったのである。そして、そのあたりの陸は西に突き出しており海難の多い岩場が待ち受けていたのである。

この日はレイエスの入り江で碇をおろし翌日風の収まった沿岸をゆっくりとエンジンで走り、朝の電話での待ち合わせ場所に向かった。そこはゴールデンゲートが次第に顔を出す、美しいボニータ岬で、ホストのグレンさんの美しいヨットとの距離が 20 メートルほどになった時、突然ふねの中から出迎えの人々による一斉の拍手が沸き起こった。私も若者のように大きく手を振ってこれに応えた。

その後、グレンご夫妻の暖かいもてなしを受け約一ヶ月滞在して帰国の途についたのである。

今回の行為は全く個人的なものではあったが新しい友人を得、多くの古い友人達の思わぬ援助や後援をいただき、友情を深め、広げることができたのはなんとも嬉しいことであった。

〈本稿は、平成 20 年度国大化学会総会時（平 20.6.29）の講演内容を書き下ろしていただいたものです〉